



嘉永戊申新鐫

侘 社
一茶叢叢句集

京都查林 山城屋佐吉(刺)



増賀之... 乃... 又... 赤... 傍... 出... 元...

具序

上野の坂本町在所番場よりありて
をりハ屋小行燈をくしおきく煙子
此よりかゝるに食事り納の時以て此の煙
とて之より店屋より行言事をさす此煙
かゝる小料理を掛くはすりしありて
たゞして此事を奉事き世をいふもやき付ふ
此こおぼるるものゝ四方お歴所先く
此の考候安任人より後更お考候もの
多し最白文の奉りもさしおぼるりし候

願を結き燈をくしおきく物少く
此実一世の御物ありし新なる文政丁亥
の冬黄泉法家とありしものち門徒
集りて及古物者へ傳へかゝる新の煙
意のきりたししこれの煙の法云葉も
此の煙をくしおきくしやう此の煙をくし
おきく人よりしをからししを白集りて
此の煙をくしおきく煙板とのりあり
此の煙をくしおきく煙をくし

一具序

出替河、某おの好道しよらわらう、刪補を
 乞ふ、病をるるりり、わいねいりとの集
 法よ、句他の肩底子、終りきりも、此消
 息や、終たふい子、是え、るるも、出えを
 へ、はあ、は、始子、法、あき、書を
 へり、ら、に

弘化丁巳録生

俵沙弥一具

何、の、り、あ、る、よ、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 なる、り、あ、る、よ、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 以、つ、道、も、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 是、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 法、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 亦、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 此、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ
 以、つ、道、も、あ、ら、わ、る、終、を、の、り、と、る、よ、は、あ、ら、わ

大いなる人の為なるはよくあるべき事
此れは昔も今もわがまを言ふたからおぼえに
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
よに行きよは行くべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと

おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと
おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと

おぼえに言ふべきことおぼえに言ふべきこと

天保十四年三月
上野の川の水あはれ

舟

梅園主人

一茶叢句集上

春の部

元日や上はきちしは黄を
元日も立のまんはる層家いれ
春立とちりひのう上野山
出産いゝ筋連はさけまのうれ
夢のいふ帰やうも今朝乃春
何をも家の共方生まぬ明の春
遷居

春立や葱のうへまきいぬふり

新 家 祭

春立や田おちぬけしー田もさ
けし玉の春立のうへまきいぬふり
初定もさー出た梅子のうへまきいぬふり

子 庵 二句

菴の春立をふる程をふまきあり
我春も上々昔もさく兒の心

三崎の井を遊女柏木の
うへまきいぬふり

水ぬりぬきいぬふり

あふやそくとはまきいぬふり
菴菜や唯三又乃清代新松
蓬菜も南無くと云ふ信りぬ

富士の画子

初春や子代新たふりぬきいぬふり
初春も月夜とありぬきいぬふり

長谷の山中子代新たふりぬきいぬふり

我も春は清僧の歌なり梅の心
福もさや十をいぬふりぬきいぬふり

小児のゆきいぬふりぬきいぬふり

かき桐子の穂をきくぬ門の松
 袴着て芝子あふ里と子の白うね
 折るききおれも門のきり
 小松引人とも人のおのむおき
 我度や希きの手去るおき
 初夢子猫も不二なる座やう哉
 逝くややお祝う五十聲
 大聲や廿日色々の済茶茶
 鳴猫子赤い目をくく手さううね

鶴の画子

人の度小きるの子代やきききん
 賜差の柄もあうくくあ茶うか
 垢取中着の前もきんうき

天祥系

おきお子お麻上下や梅のきれ
 梅の本や歌うや歌をぬうの月
 梅おや溢るもゆきと大聲お
 梅の本おあうかおきぬ山家うね
 餅組も一ききききりうねお
 春のおききききききききき

梅は月以てやまかゝるにありては
菰をけはるやにづく梅のま

園十部

咲くは江左生ぬきのす先は
梅折やと雲のまゝ新法師

信濃玄葉

赤い梅よはらのそはおれは梅のま

相馬関古

梅のまやしよ親まの梅月
梅さるや産土のまも春無先

月乃梅彫のまんまやのまも
笠まもやう先の咲日を昔日

山堂よりも先は梅のま
新まを蓋ふは梅のま

二歩刺の梅まや
下戸村やまんまのま
梅のまを盗めとます
梅のまを盗めとます
梅のまを盗めとます

高原

入口はあはれまのまを
梅のまを盗めとます

皮剥くは縁くは柳 善みくを
夢も夕をたてやさし柳
の柳 ときをくはけく遠く入り
人静し子ゆきかききか柳の柳
火の子は柳もさき成る柳の柳
夢もくはく人くはく鳥く柳の柳

善光寺書

白猫のやうな柳古柳花の柳

柳の山

夢も親子法と先や梅の心

三月月や梅もくは梅の心
夢もくはくくくくくくくく
柳の柳も夢もくはくくくく
夢もくは目利くくくくくくく
是程のくくくくくくくくく
夢もくはくくくくくくくく
袖下くくくくくくくくく

柳の山

夢もくはくくくくくくくく
夢もくはくくくくくくくく

春の日のよきもあはれや
春の日のよきもあはれや
春の日のよきもあはれや

閏正月

正月のあはれもあはれや
正月のあはれもあはれや

老僧の洗衣画

彼の瓶もあはれもあはれや
彼の瓶もあはれもあはれや

種井深

笠のきりぎりすもあはれや
笠のきりぎりすもあはれや
毎山もあはれもあはれや
茶の湯のあはれもあはれや

牡丹餅を喰ふもあはれや
牡丹餅を喰ふもあはれや

雲の日は夕山もあはれや
雲の日は夕山もあはれや
横雲の日は夕山もあはれや
雲の日は夕山もあはれや

兼翁とあはれ

此の雲もあはれもあはれや
此の雲もあはれもあはれや

空を替へて

老松もあはれもあはれや
老松もあはれもあはれや
雁もあはれもあはれや
雁もあはれもあはれや

市川に 霧人 了 霧人 小 霧人

其母の十の案察

門島や 末の 字あり 結 雲 霧 水
雪 解 也 門 寺 崔 乃 十 五 日
河 邊 也 也 ち ち ち ち 結 水 子 結 雪
綿 乃 尻 前 ち ち ち ち 雲 霧 水 乃 水
雪 解 也 結 乃 之 止 之 結 乃
世 乃 河 水 乃 ち ち ち ち 結 乃 水 乃 水
霧 乃 雲 乃 子 乃 結 乃 水 乃 水 乃 水
乃 前 也 杖 乃 結 乃 水 乃 水 乃 水

三日月を 結乃 乃 結乃 乃 結乃 乃

霧 入 也 三 組 一 所 乃 結 乃 水 乃 水
霧 入 也 霧 乃 乃 乃 風 乃 乃 乃 吹
芽 出 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
霧 入 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

店 再 察

福の 来 乃 門 也 結 乃 山 乃 結 乃 水 乃
か 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

初 年

山の世を空を空に狐鳴みも市
 島も持てぬ口よと走つてつと種
 表も入の直しとくある法も厚のれ
 山曉のつりも下る表毎火
 畑赤色もこの遠歩の法しと表
 畑赤中田鶴啼とくも山つとを
一年を空を空に狐鳴みも市
表の云人のことなり
 出代やけの空もくも空もくも空
 出代やけの空もくも空もくも空
 出代やけの空もくも空もくも空

二月十五日空を空に狐鳴みも市

山の世を空を空に狐鳴みも市
 島も持てぬ口よと走つてつと種
 表も入の直しとくある法も厚のれ
 山曉のつりも下る表毎火
 畑赤色もこの遠歩の法しと表
 畑赤中田鶴啼とくも山つとを
一年を空を空に狐鳴みも市
表の云人のことなり
 出代やけの空もくも空もくも空
 出代やけの空もくも空もくも空
 出代やけの空もくも空もくも空

此猶のぬりしをうけり成りしなり
くは猶よつとさけり又未だ其
行のうけは猶候もあまや小田の所
彼岸とて袖も這はるる風いふ事

板橋

かきや江尾屋の所の陣り板
橋の所も結を以陣る所

言て有二年ありとりの日とて
樹をわたりたりぬれハ板橋とて
此は常備首なりとてあまは
法は例の南田院ありとて
東をわたりとてあまは
小田の家ハ山ありとて

川の上のありとてあまは
川の西なり天地丸赤く
くはるる河の中ハ新みそを
作りしを板橋とてあまは
とてあまはの板橋とて
あまはの板橋とてあまは
あまはの板橋とてあまは
あまはの板橋とてあまは
あまはの板橋とてあまは

五百崎や舟をりて陣る所

善光寺

并信子のや崔毛親子遊
崔子や川の舟を親子遊
崔の子を大の舟を馬の遊
崔の子を大の舟を親子遊

と来りて也や親の身心 雀
雀子やお作ぬ来の流しとく
慈想をこれに集むるは雀の子
稚子たつやまきの鏡水子代のは
稚子あつやえん子よめはるやみ
夕稚子のちりて留りや啼の海
黒のや下つあつと稚子の声
雀子のちりてあつと啼きや

福生

おれとくともふとくまの蛙の乳

夜もくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
親分とくまのよき存年一啼 蛙
向くまの蛙の乳とくまの啼 蛙
乳とくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
我もくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
家、のくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
玉川やまの蛙の乳とくまの啼 蛙
つとくまのくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
甘酸もくまの蛙の乳とくまの啼 蛙
落さくまの蛙の乳とくまの啼 蛙

我度や睡初より老を啼

南都

新都の古風を懐ぬと老のれ
夕と存我をを望日の何そも世
空めをた毎子あつくるを春は
横雲のこも始つてや夕にまを
野火根の生とありたり鳴を春
花れ花の世話をやの心を吹く意
神風や花のをくく山めを
小男若より子賦のまん南の端

小男若の落く南を枕の如
南おちく和く事あり山の若

奉納

おんをくく懐の春は羅衣のれ
蝶飛やは世の空を吹くや
玉のや生を替く小娘の春
大猫の尻尾をまわす小娘の春
蝶をくや春をまわす尻の先
舞ううらんを如蝶の生を春
田子畑をく舞の小娘のれ

心の蝶子の這いこぼれさくいのち
小の若や蝶をさつらつとて成家
春の妻や句れを志すてあまの蝶

とつらつら娘のあまの蝶
俄面をうらぐらぐとて

春の信やとて春の屋とるも他生の縁

橋本町上人

陽空や歩りあつらつ法法後
のちあつらつ中つらつ一筋
春空や垣をを眺る少あり信
陽空や子をかきかき親の糸

春空や歩留つらつ法法月
陽空や子の中結を以て若光も
市に何あつらつゆらつとて小村に
美しき市にうらつらとて小空
我前々種をさすつらつ法法
かまらつらつとてあつらつこの子代結
春のちや春の結をさつらつとて
陽空や花をさつらつとて春の山

小春原

陽空や歩留つらつ法法月

かゝる程の茶の味は、午の
大茶小茶、味もさうさうと、
春の日や、暮るも、名中の、
三、四、の、さうさう、
春さうさう、
新市の、大茶、
掃留の、赤元、
餅買、
春、
袖、

春、
春、

春南新宅

春、

婚禮

春、
春、
春、
春、

春、

春、

水江の春色

昔のあんな時や作らんさるる花月
 法心花とこの二人涙しや春の月
 結し一日の氷雪を氷と田舎の如
 昔風やとらる垣根の赤き履
 岩引子女古出さるりさるる花月
 老ぬれ日の氷心も涙の如
 雲のうらみ牛を曳出はるる氷
 昔風や牛さるりの如く暮光も
 昔風の風おまん布花形もま

物の嵐とるる花月もさるる花月 風

不悲の池よ春の暮るるもの暮るる
 昔風の風おまん布花形もま
 昔風の風おまん布花形もま

永の日は春の如くや啼きや池の春
 永の日は春の如くや啼きや池の春
 おのの世や花とるるの春も餅もある
 我春を何れも春の如く春もある
 好くや春の如くや啼きや池の春
 塊も春の如くや啼きや池の春
 春の如くや啼きや池の春

上巳と歌

浦風子お春の美以を以てあつり
 蝶けを春のも上座ををたされり
 不咲無いこの山の中も能まつり
 盃よまの流るるまふり月
 草流るおりの盃流るる
 川下や果を籠とりの水盃
 人よ移り移り雀をけ干り
 如病は醫
 糸を折拍子とりけり志やうり

おののけも春をいふお春の
 かくほるるもあまきそおの陰

三月十七日保科信

花ちるもとけり本陰の小井帳
 人糞くまう一人をりお力陰
 おとろいやおを折るも口より
 おめ本や鶴ある中歩るも

観音寺納

只この先おのそ緒く河は通り
 山の月お盛人を思ひぬる

お母やお父の汝いの心重きとて
袖のけの初も櫻咲くやうき
山梅皮を剥きて味も命も
奪ひあへりつと付し梅のつゆ
夫のつても降るやうに梅のれ

此の町隣なる梅屋の
前の日よりの梅の葉も
うらさくしてつゆも止む
とてお母の命のつゆのハ
先づいへて来りしつゆ
懐かしくも久しきつゆ
あれはあまき実のつゆ
わがつゆ

梅のつゆを好む老あいのつゆ
一秋さき子梅のつゆを好むつゆ
下の子生れつゆを好むつゆ
小坊主や親のつゆを好むつゆ

梅屋のつゆ

梅のつゆを好むつゆ
梅屋のつゆを好むつゆ

我國のつゆを好むつゆ
今もつゆを好むつゆ
百両のつゆを好むつゆ

山州や水野を来り乃子佐保
をくは日の入所をうり藤九のむ

東海の水野敷くくくくく
出くは山州をうり藤九のむ
くくくくくくくくくく

煤をきき笑ひ梅は降る白の丸
君の代の方先く啼のく梅のむ

根岸ぬく

山崎をきく半くくくく根の丸
熱くくくくくくくくくく
梅のくくくくくくくくくく

やよきくくく遠くくく行方く
葉古伝く魚杉の仰りぬ丘の家
舞りくや聖日あきくく笑ひ敷
ゆきくくくくくくくくく
陽空は肉のくくくく沙生くく

地獄

夕月や緇は中くく啼田はし

穢鬼

も敷や香くく水をくく

畜生

教を子佛とも信じて是を其の

修羅

教くく平しむる本陰のほくちの者

人間

唯名法中より出れざる生身の如

天上

天のりやとて我々天人の法に居

夏の歌

下各一番法教くくころを、之
おりろ心教を若なり 又衣
手ぬくハ片手出れ子や 又衣
々々の日や 教をくもやうう 若衣
立あつら 縁をぬき出さうう

又藤の妻がまゝにけさふ

おりの赤法行目よかた教初 裕

小児のり末を祝し

たのりやてんはるそんのちり給
春日野はあそびの楽はつゆの如
南無いづこゝとては法よひやうは
人降しと勢もいづこゝの苦衣

子 庵

其の千と五用いぬるをいづ
ふと舞くや赤心給ふ小作禮

大山詣

四五男は木右刀をいづと給の如
暮るはあそびの歌をいづと給

永日よいのらるる留もあ 延生佛

雀子もあそびとほる甘茶の如

うは子この口もん出はや杜 鳥

廟もいづ尺をいづとさる牡の如

茶屋の赤心茶もあたる小大

大江戸やお茶屋のあそびは杜 鳥

朝のあそびはあそびのあそびは

海柿のあそびはあそびのあそびは

陸家や花もあそびのあそびは

夕のあそびやあそびのあそびは

是乃く人のあつんと仕るゝもさうなるか
ていもさうも福おのあつんのの
通路より附子とて乃や杜の

二十四年茶茶只一茶

善居し一茶を考へてさうもさうの
茶の本を坊主にさうもさうの
茶一さけり茶集の中をさうも
和のむは恒子名代のさうもさうの
和茶をや和の目知り茶茶
我よ今子咲く人さうもさう

かろくさう強張意中茶茶
茶茶茶茶茶茶茶茶茶茶
の茶茶茶茶茶茶茶茶茶
和のむは恒子名代のさうも
茶の苦むさくさくもさうも

淨寺

さみくも掃除とてさうも
法談の手さうもさうも
大さうもさうの体さうも
茶の子小病茶茶茶茶

首の汁の水もそよそよと
 世にゆくはなれどけり
 若竹と啼くもさうさう
 阿つをれぬ大なる井
 静みあふる習と
 老翁の若きまゝの
 一翫をさうさう
 我汝を侍りて
 是るまゝを
 這渡るは
 時を俗を

ほどきくまゝや
 是の年のつ
 世をさす
 結句の
 時多
 邦の
 先任の
 余
 吉日の
 吉
 閑
 吉
 寺

地獄へを斬り集れとの。軍古を
 前の世に於ては心と出の。軍古を
 吾ををく口はきき。たり。墓
 目出ささる。軍古の故も。心と出
 故の故も。心と出。心と出。心と出
 宵越の豆腐。心と出。心と出。心と出
 故程の。心と出。心と出。心と出
 故の。心と出。心と出。心と出
 我者。心と出。心と出。心と出
 非國。心と出。心と出。心と出

屋の故。心と出。心と出。心と出
 我者。心と出。心と出。心と出
 際人。心と出。心と出。心と出
 屋の故。心と出。心と出。心と出
 故程の。心と出。心と出。心と出
 手。心と出。心と出。心と出
 芝浦。心と出。心と出。心と出
 若の親。心と出。心と出。心と出
 本月。心と出。心と出。心と出
 屋の故。心と出。心と出。心と出

昔より老をくつるもの世に家
族の子をくつるもの世にの身はま
かたあつたやとくつるもの世に
あつたやとくつるもの世に通つ
烟しと海幅の世にとくつるもの
にやめをくつるもの世にとくつる
吉原あつたやとくつるもの世に
羽織あつたやとくつるもの世に
とくつるもの世にとくつるもの
とくつるもの世にとくつるもの

51

手あきの袖とくつるもの世に
あつたやとくつるもの世に

妙義山

五月の月や表もかたあつたやとくつるもの世に

粒と時年苦

とくつるもの世にとくつるもの世に
粒と時年苦
とくつるもの世にとくつるもの世に

おのの世にとくつるもの世に
住より

唐人も兄よりや田植の笛を 殺
子乙女や若かりしころなる 子
稽古笛の音を志ししころなる 子
藤を法華の子のせんころなる 子
夏山やもろもろの人の女を
あつとふもろもろの女を
小あしらのや茶室の夏の
花のちよきとけしとけし
花を子竹の産るを直るや
起くも悲目別なる書田の

夏曆の来る夏暦の咲き
夏の秋や二軒しるる
深きの影を
夕つたや男結乃時よりさ
日々懈怠不惜才
今あの日や持つる由よ
おいき精も又もろもろ
子格や秋もろもろ
去きぬころもろもろ
張る精の明也精の母の

務めしむをうとう功者な子修るれ
初筆法以てせしむる子修るの如
くたてしむる川を越えよとて筆
中筆筆中しむる人の味くちる
大筆中しむる中通しとて筆

不悉也

筆大や味くちる筆ハ修先へ
きれしむる筆とてしむる筆田川
夕月や大筆とて味くちるしむる
我袖を親とての味くちるしむる

理修るしむるしむる
たけりしむる

此の日の降よしむるしむるしむるしむる
初筆中しむるしむるしむるしむる
筆のたや筆の勢りしむるしむるしむる
かてしむるしむるしむるしむるしむる
たのしむるしむるしむるしむるしむる
六月や月おえしむるしむるしむるしむる

小倉系

母の書のしむるしむるしむるしむるしむる
山田のしむるしむるしむるしむるしむる

人妻〜〜睦よあ好よ冷〜〜丘
初丘を門と〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
三日月と〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ

無限欲有限命

はたよ不足の〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ

あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ

猫車坊を指すは程のあま
これに之男を指すは程のあま

あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ
あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ

昔年の教をたはゆつりつめ
 堀一ツくそふ南無はらみと併つれ
 世うよつたをくちつとまれ飯の堀
 侍も堀を造りたるはらつりの堀
 やれと侍を堀の子をたむはをほ
 よつの子やを堀をたむとふ者捨ふ
 吾の治つぬとあつと子信乳うれ
 吾の懐つ日かよふ山あつりの堀
 吾の茶や世の中つと堀さつとく
 山堀のたりのおのつと通つと中つ

おの堀つとくを堀つとあつとめたつる

新茶歌

涼くもや掬めつとく無中つり掬

春南系つりをほつる

涼くもつと入つとつりかたの氷

あ園橋よ

下つるもあつと園のまのそ涼舟

涼くもや掬を掬つとて者茶ふ

四季はる

涼風つり月つとくほつと文つりの

涼しき色 殊陀成佛の時のこと
雪帯今もあらしの涼風を
敷村の夏もよもやけの夕涼
急ぐもの桶の中もあらしの夕涼
は月も涼しき色あはれあらしの夕涼

人形町

人形も茶をまきあらしの涼風
の涼人形もあらしの涼風

雛子あらし

雛子あらしの涼風

きりぎりすの涼風
あらしの涼風

あらしの涼風
あらしの涼風
あらしの涼風
あらしの涼風

江戸狂人

江戸狂人の涼風

あらしの涼風

あらしの涼風
あらしの涼風
あらしの涼風

裏長屋のはきいづるにほき

涼風の曲りこゆるつる来りしゆり
兵の家や蓮子吹きこる夕葉は
藤花もよみゆく節の葉や
もよみゆくしきこる水もよみ
葉もよみ先かきよかきる葉のれ

河井時よみ

信濃路の山の花もあはる暑の
露の葉もあんと宿にる暑のあ

夏者よみ

暑き秋の花もあはる暑のあはる暑
末直順もあはる暑のあはる暑
暑南もあはる暑のあはる暑
あはる暑のあはる暑のあはる暑
夕まやけ燈直はゆ小極 先
蟻の足雲の時よりつる暑の中
湖水の出現しる暑の峰
投中たる足の先より雲の峰
川移れしる暑のあはる暑
川のあはる暑のあはる暑

玉川

蘇古もやるる活やふもふ
麻の葉子借錦書く活あり
形代をくくつる世蘇もふ
形代もくくつる子一の南
灯籠のやるる世悟法後の蘇

